



家族の誰からも愛された可愛い妹、そして、誰よりも愛情深かった末の妹が6月11日に68歳という若さで召されました。残念です。妹は昨年3月に子宮体癌ステージⅣと告知され、すぐに入院、手術、抗がん剤治療に入りました。主治医の方針で、免疫力が非常に低下しているため、感染症になると致命的と言われ、手術後は面会謝絶となりました。退院後も自宅に空気清浄機を2台設置し、来客にも会わず、外出もしてませんでした。私たちはメールや電話などで連絡を取り、病状を知り、慰め、励まし、共に回復を祈ってきました。副作用も少なく、6回の抗がん剤治療も終え、9月11日の検査で、転移は認められないと知らさ

れ、どれだけ喜び、感謝したことでしょう。その最中に、私の夫が悪性リンパ腫になり、こちらも入院、治療となりました。今度は妹が回復を祈ってくれました。私は夫の看病に毎日病院通いをしました。

妹は定期検診を受けながら、順調に日々を過ごし、快気祝いの席を設け、兄弟姉妹が集まろうとしているその頃に、腹水が溜まり出し、再発と診断され、2度目の抗がん剤治療が始まりました。妹は告知された時点で、教会生活が難しくなる場合を想定し、今後のあり方、担ってきた奉仕活動を、他の方に依頼するなど、牧師、教会に手紙を書き、連絡しておりました。そして自身の葬儀の仕方をすべて自分で設定していました。妹のどこにあのような決断的な、行動的な面があったのでしょうか。

妹は「静子ちゃん」と呼ばれて成長し、学校ごっこでは、私の生徒になってくれました。潔癖で生真面目でしたから、からかっては、怒らせ、よく泣かせたものでした。3歳上の姉の礼子と大の仲良しで、素直に信仰を喜び、教会を大切に、奉仕に熱心でした。幼稚園教諭となり、やがて結婚し、茨城県の伊奈村に家を建て、長男、長女に恵まれ、専業主婦として充実した日々を送りました。田舎では車は不可欠で、妹は運転が上手になりました。私たちの父が下谷教会を辞任し、神奈川県の実家を拠点に、開拓伝道をはじめた時、伝道を応援するために、高座渋谷教会に転会しました。非常に距離がありましたが、父や牧師となった姉礼子と共に教会に奉仕する喜びで一杯だったようです。



やがて夫の転勤でアメリカのワシントン DC に住み、そこでも日本人教会を探して、信徒として働きました。良いタイミングとばかり、私はアメリカン大学の夏季講習を受けることにし、妹の自宅を宿に、妹の車で大学へ送迎してもらい、甥、姪とも一緒に旅をし、たくさんの恩恵を受けました。妹家族とあまりにも楽しく過ごし、おかげで私の英語は上達しませんでした。

帰国後は夫の両親を呼び寄せ、二世帯住宅にして、過ごしました。それなりの苦労があったかもしれませんが、穏やかに20年以上共に暮らしたので、また、私たちの母が最期を迎えた時、母を自宅に引き取り、介護し、看取ってくれました。表立って活躍する妹ではありませんでしたが、静かに、控えめに、でも確実に、喜んで、弱い人を支える努力を惜しみませんでした。私たち子どもは「地上では旅人」と母に言われて、育ちました。やがて天に召されることを望み、祈りながら、生きてきました。妹は腹水を抜き始めたところから、体力が落ちましたが、力の限りに別れの準備を整えました。

葬儀では弔辞を受けるのではなく、会葬者に手紙を残し、感謝し、信仰を与えられた喜びと力を証し、夫への敬愛、子どもへの愛、家族、友人への思いを伝え、最後に「基地はいらない・誰の子どもも殺させない・辺野古の海を埋めないで」と平和への願いを込めて横断幕を手作りし、活動してきたことを誇り、その思いを伝えるお別れの言葉を娘に代読させました。妹の言葉を胸に刻んで、私たち会葬者は♪また会う日まで、神の恵み、絶えせず共にあれ♪と歌いつつ、天に送りました。